

4-3. 長期避難と避難所生活

1. 短時間帰宅・一時帰宅などの実施

01. 虻田町避難指示区域(カテゴリー1)で一時帰宅(30分)を実施した。

虻田町はきょう16日から、噴火以来立ち入りが一切できなかった洞爺湖温泉街と泉地区の一時帰宅を実施する。

16日に帰宅するのは、洞爺湖温泉街の北西にある珍小島周辺地区の避難住民。対象となるのは41世帯で、希望する各世帯から1人ずつが参加する。寄託者の集合場所は旧月浦小学校で、午前9時半までに集まり、同10時から12人ずつの3グループが順次、正味30分間の短時間帰宅を実施する。

泉地区の対象93世帯は17日から19日までの3日間で実施し、洞爺湖温泉街東側地区の同734世帯は20日から実施するが、天候や火山活動の変化によって順延する。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.208]

有珠山噴火以来、一切立ち入り禁止となっていた虻田町洞爺湖温泉地区の住民が16日午前、30分の短時間ながら48日ぶりに、わが家に一時帰宅した。

虻田町は、危険性が高いとされるカテゴリー1と呼ばれる洞爺湖温泉と泉両地区の一部で一時帰宅を決定、この日は、洞爺湖温泉地区北西の珍小島周辺地区の41世帯が対象となった。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.208]

虻田町は10日、洞爺湖温泉町西側(温泉5区と温泉8区のそれぞれ一部)地域で、特別活動に基づく短期間帰宅を11、12の両日に実施する - と発表した。両地域とも有珠山噴火以降、初めての一時帰宅で、帰宅時間は正味30分間。珍小島地区の取水口前広場に集合し、両日とも午前11時から実施する。

対象地域は、温泉8区がとうけんグラウンド近くの国道230号交差点から、「さくら橋」に向かう町道沿いにある72世帯で、11日に実施。一方、温泉5区が国道230号沿いの96世帯を対象に、12日に行く。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.242]

02. 虻田町の避難指示区域(カテゴリー1)の避難住民に対する車上視察を実施した。

虻田町の避難指示地域(CI地域)の避難住民を車上(自衛隊車両)から自宅周辺の視察を実施した。

6月27日 11:00～16:30 洞爺湖温泉地区西・東(火口周辺)(70世帯70名)実施

6月29日 11:00～16:50 洞爺湖温泉地区西・東(火口周辺)(50世帯58名)実施

7月12日 13:15～14:00 洞爺湖温泉地区西側(火口周辺)(10世帯20名)実施

(CI特別活動(荷物搬出)から車上視察に切替実施)[『2000年有珠山噴火災害・復興記録』北海道(2003/3),p.90]

陸上自衛隊の装甲車による洞爺湖温泉地区西側の火口周辺(カテゴリー1)の住民視察は、

雨の中、予定通り行われた。集合場所の珍小島駐車場に集まった住民は、町職員から注意事項の説明を受け、ヘルメットなどを着用。70世帯70人が装甲車3台に6人ずつ分乗し、5グループに分かれて視察した。噴火以来、一度も立ち入りを許されていなかった町営浴場やすらぎの家付近まで向かったが、雨のため正味10分間の視察となった。

町営団地の1号棟に住んでいたホテル従業員(中略)は視察を終え、「自衛隊の方が頑張ってくれたが、平屋の家が屋根近くまで灰に埋まっていた」という。「ここが最後の場所と決めていたが、仕方がないことだ。一緒に行った人たちも残念そうで、涙が出そうだった」と視線を落した。「本部にも要請していますが、せめて家から出せるものを早く出したい」と訴えていた。

装甲車による視察は28日も行われ、西山団地方圏31人、桜ヶ丘団地方面42人の住民が、それぞれ車上視察する予定。一方、温泉地区東側・虻田商工会支所付近などの住民96人の一時帰宅は、雨のため29日に延期となった。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.253]



写真 車上視察の状況(提供：陸上自衛隊)

03. 短時間帰宅等を実施できない地域の避難住民に対して、洞爺湖湖上からの避難指示地域の視察を実施した。

これまで短時間帰宅等を実施できない地域の避難住民を洞爺湖湖上より避難指示地域の視察を実施した。

対象者は洞爺湖温泉町の住民で、洞爺湖汽船「エスポール」を使用し洞爺村棧橋から出港し洞爺湖温泉沖1.5kmまで運航する経路で行われた。

なお、自衛隊ヘリによる上空監視に加え、警備艇・支援船を伴走させるとともに、陸上部に救急隊を待機させ警備対策を実施した。

実施日 平成12年4月18日(火)1回目10時～11時 2回目14時～15時
対象者 洞爺湖温泉町地区住民 1回目豊浦町から長万部町方面の避難住民174名 2回目虻田町から登別市方面の避難住民239名[『2000年有珠山噴火災害・復興記録』北海道(2003/3),p.90]

04. 虻田町の避難指示地域(カテゴリー1)において、避難住民が荷物等の搬出を行う特別活動を実施した。

虻田町における避難指示地域のうち、噴石と火砕サージの危険性が高く、地域内への立ち入りが特に困難な地域の一部(CI 地域)において、避難住民が荷物等の搬出を行う特別活動を実施した。この特別活動は極めて短時間の帰宅〔40分以内(帰宅時間30分、車両への往復時間10分)〕で荷物等の搬出を行うものであり、5月16日から7月15日まで行われた。[『2000年有珠山噴火災害・復興記録』北海道(2003/3),p.90]

2. 避難所の統廃合

01. 登別市避難所登別老人福祉センターを閉鎖した。

有珠山噴火で、8市町村に分散して設けられた24避難所のうち、長万部町の3カ所と豊浦町の3カ所、登別市の1カ所を閉鎖し、豊浦町と虻田町の避難所に集約する引っ越し作業が28日行われた。虻田町民242人は、新たに指定された豊浦町ふるさとドームと、虻田町のあぶたふれ合いセンター、青葉集会所などの4カ所にそれぞれ移動し、新たな避難生活を始めた。

今回、閉鎖されたのは、長万部町のスポーツセンター(27日現在の避難者数70人)と福祉センター(同158人)、青少年会館(同53人)、豊浦町の旭町集会所(同11人)と旭町児童館(同28人)、海岸町福祉の家(同6人)、登別市老人福祉センター(同16人)の計7カ所。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.227]

02. 壮瞥町久保内青少年会館避難所を閉鎖した。

虻田町は同日、室蘭市体育館と壮瞥町久保内青少年会館の避難所を閉鎖し、31世帯、64人を虻田町高砂町のコミュニティーセンターに集約した。これで壮瞥町内に避難所はなくなり、避難所の数は豊浦町4、洞爺村3、室蘭市1、虻田町7、伊達市3の合わせて18カ所となった。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.235]

03. 室蘭市避難所1箇所、洞爺村2箇所の避難所を閉鎖した。

有珠山噴火のために2市2町1村に設けられていた15避難所のうち5カ所の廃止、引っ越し作業が18日行われた。虻田町民201人が仮設住宅や虻田町に居を移し、新たな避難生活を始めた。

廃止された避難所は、虻田町の旧月浦小学校(18日現在の避難者数36人)、洞爺村の洞爺少年自然の家(同23人)と農業研修センター(同26人)、伊達市のだて歴史の杜カルチャーセンター(同83人)、室蘭市のサンライフ室蘭(同33人)の5施設。集約で虻田町外の避難所は豊浦町3、伊達市2の計5カ所となる。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.247]

3. 精神的ストレス

01. 避難生活が続く中で、避難住民にはストレスが溜まっていった。

室蘭保健所内に事務局を置く「心のケア班」は、精神科医師、保健福祉士、保健婦、臨床心理士、児童相談所職員ら専門家で構成された約10人が、2班に分かれて活動している。一班は豊浦、長万部の避難所、もう一班は伊達、室蘭などの避難所を担当。巡回や常駐で対応している。

噴火直後の4月1日から活動を始め、18日までにケアを受けた人は延べ303人。全体的な声掛けから始め、4日以後は個別対応を中心にカウンセリング、精神療法などのケアに当たっている。

このうち、噴火以前から精神科などに通院していた患者は2割に満たず、8割以上が噴火を契機に始まった症状。うっとうしい気分の抑鬱(うつ)状態や、悲哀感に陥る人が多いという。

特に、知的面の機能が低下していたお年寄りが、避難所の不安定な環境から問題が顕在化したり、幼い子供を抱える母親が周囲への気兼ねからストレスがたまるケース。自宅に置き去りにしたペットの心配、失業や家屋被害による将来不安など、多様な問題に起因している。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.147]

有珠山の噴火で避難し住民のうち、避難所の医療救護班に体調不良を売った診察を受けた人が、延べ9000人に上ることが道庁のまとめで3日までに分かった。道保健福祉部では「風邪のほか、避難生活のストレスによる不眠や胃腸不良が多い」と話している。

道によると、救護班が設置された3月31日以降、受診した避難住民は1日現在で述べ8972人。うち32人(男性21人、女性11人)が骨折や発熱などで入院した。入院した人で生命にかかわるほどの重い病気の患者はいないという。[『有珠山 - 平成噴火とその記録 - 』室蘭民報社(2000/12),p.187]

奥尻島や神戸の場合にはほとんどの人が住居の被害や人的な被害という外傷的ストレスを受けており、そこに避難生活という累積的ストレスが加わっていたのに対し、有珠山の場合、とくに初期には住居を含め実質的な被害を受けた人はほとんどおらず、そのストレスは避難生活から生じる累積的ストレスが中心であった。それには、避難生活そのものから来るストレスのほかに、残してきた自宅や畑などの被害への心配や、火山活動の終息の見通しが立たないため、避難生活の長期化への心配から来るストレスが含まれ

る。[槇島敏治「日本赤十字社の有珠山噴火避難者に対する心理的支援プログラム」『日本
集団災害医学会誌』 日本集団災害医学会(2001/8),p.35]

避難が行政の避難指示により同時に行われたため、避難者の境遇はほぼ同じであり、ス
トレスの程度も均一に近いと推測された。(中略)

しかし、時間の経過とともに避難指示が解除になったり、一部避難者に一時帰宅が許
可されたりする一方で、自宅や畑などへの噴火の直接被害を受ける避難者も生じて、当
初の均一的な状況は崩れていった。[槇島敏治「日本赤十字社の有珠山噴火避難者に対す
る心理的支援プログラム」『日本集団災害医学会誌』 日本集団災害医学会(2001/8),p.35]